サンスクリット文献史　月曜３限（天野）2025/06/02

「無」とは

- 有機的、無機的存在が全くない、という意味ではない
- 無秩序、カオス
- 形をとっているものがない、未分節化（～　ソシュール言語学：signifiant「記号表現」とsignifié「記号内容」）
- 上下左右ない
- 時間がない
- 一人称がない（視点がない）
- 無限；際限なく広がっているか、無限ループ
- 区切りがない
- 空間がある、というのは前提では（存在の必要条件）
- 全くの「無」から「有」が生まれることはなく、最初から、永遠に「有」が存在している

- 真っ白
    - タブラ・ラーサ「白紙」; 人間の心は生まれた時は白紙であり、知識や概念は経験によって形成される（経験論）；ジョン・ロック（17C,イギリス『人間知性論』
    - ビッグバンの前は真っ白で小さい空間（宇宙が暗くて無限なのでその反対）
- 黒、暗闇（光のない状態；目を閉じた状態）
    - 闇、何も見えず、赤紫や緑の円が視界に現れては消えてゆく
    - ブラックホールのほうにすべてを吸収する
    - 黒い小さな・（それが拡大して、空間や世界の構成要素が誕生する）
- 灰色
- 砂嵐のようなもの
- 闇の中で煙がうずまいているよう（無としっても精神的なものは存在する）
- 水だけが存在する；創世記「地は茫漠として何もなく、闇が大水の面の上にあり、神の霊がその水の面を動いていた」；羊水

- 静寂
- 聴覚的な無の方がイメージしやすい。すごく性能のよい防音の壁に囲まれ、声が反響することなく壁に吸い込まれ、音がなさすぎて耳鳴りがするように感じる

- 人間が干渉できない
- 認識できない、五感がすべて機能していない；視覚、聴覚、嗅覚、、、
　　清水寺の隋求堂、胎内めぐり。
　　＊信貴山朝護孫子寺、戒壇巡り（覚鑁上人が毘沙門天より授かった如意宝珠が地下に納められている）
　　＊本当の「真っ暗」は、現代人は体験することがほとんどない（本当の真っ暗な場所では目も慣れない）が、古代の人は体験していた。現代でもアフリカとか。慣れている人でも怖いもの。闇には近寄らない。石井美保『めぐり流れるものの人類学』
- 認識できない何かに満たされている
- 外側から見ても何ものでもない（外の世界における自分がなく、メタ的な認知を持てない）

涅槃
- あらゆる刺激がない
- 自分がない、忘我、自己と他者の区別がない（～梵我一如）
- 忘我、無意識な状態：何かに没頭して、声をかけられても気付かず、勝手に手が動いている
- 自分（考えている自分）があるのに「無」を考えるのが難しい。よって、無意識、忘我、が無に一番近いのでは。

- 人間には想像できる範疇ものものではない（有しか知らないので、知らないものは想像できない）、言語的に説明することも、思考で捉えることもできない
- 逆に、人間が頭の中だけで考えることのできる形而上のもの
- 「無」など存在しない；「この部屋には何もない」など限定された空間などでは成立するが

- 涅槃～無：欲望からの解放、死あるいは生まれる前の状態への回帰
- 人間が寝ている状態；「世界の始まり」は目覚め
　　＊ウパニシャッドに、解脱を人間が寝ている状態に喩える議論がある

-「有る」の反対は「無い」ではない！

「無」に単なる否定でない意味を求める議論
＊ハイデガー、「有る」ことの意味を根本的に問うた。「無」は否定ではなく、「有」についての問いを開く契機、存在者が立ち現れる地平。

＊「空」仏教、中観派、ナーガールジュナ（龍樹）、「固定的な実態がないこと」
＊老子、「無」は宇宙の根源

龍樹の「空」の思想

この世界のすべては「フィクション」。
「言葉の魔法」にかかっている。

「ミッキーマウスは存在するか？」

「ファミチキ」と呼ぶか「鳥の死体」と呼ぶか

友人、家族、会社もフィクション？
「関係性」によって成り立つだけで、「友人」という実体は存在しない。
「会社」も例えば登記がなくなれば消える。

＊言葉によって世界が成り立っている、という物の見方を徹底的に否定（論破）する。

ブッダの「無我」我（アートマン）がない
それ単独で存在しているものはない。
あるものの結果であったり、原因であったり。常に変化し、常に他との関わりの中で存在している。縁起：「他のものに拠って生じる」

「世界の始まり」

- 突然起こる；爆発のよう；大きな衝撃；科学反応のよう；いきなり生じる

- ビッグバン：ある特異点から生じた（想像しにくい）
- 闇の中に光がさす（何も見えなかったのが、見えるようになる）
- 光〜エネルギーが与えられ、事物の創成が駆動される
- 「無」から何かが生起するのは考えにくい。別の世界の干渉があるのでは。
- 無の中に濃度の違いのように有の材料となる概念が存在する。無が「薄い」部分から有が生成された。
- 混沌の中に、様々な存在の「元」のようなものが含まれている
- 混沌に秩序が与えられること
- 区切りができること、部分に分割されること
- 知覚と認識ができるようになる
- 最初の人間の誕生、最初の人間が目を開いた時
- 自意識の誕生
- 外界における自分の誕生、人間が互いの存在を「人間」として認識できるようになった時
- これらは言葉により思考を構成する知性の現れ
- 神の誕生
-「目覚め」（↔睡眠）、「夜明け」（↔夜の暗闇）

宇宙開闢の歌　リグヴェーダ 10.129（辻直四郎訳）

10.129.1 そのとき（太初において）無もなかりき、有もなかりき。
空界もなかりき、その上の天もなかりき。
何物か発動せし、いずこに、誰の庇護の下に。深くして測るべからざる水は存在せりや。

＊「有」サンスクリット原文では、sat-： 動詞 as「存在する」の現在分詞、中性単数「存在している[もの]」。
　「無」は asat- (a-は名詞・形容詞に付く否定辞）「存在していない[もの]」

10.129.2 そのとき、死もなかりき、不死もなかりき。
夜と昼との標識（日月・星辰）もなかりき。
かの唯一物（中性の根本原理）は、自力により風なく呼吸せり~~（生存の徴候）~~。
これよりほかに何ものも存在せざりき。

＊自力 svadhā-; 5 の「自存力」と同じ単語（5 では複数）

10.129.3 太初において、暗黒は暗黒に蔽われたりき。この一切は標識なき水波なりき。
空虚に蔽われ発現しつつあるもの、かの唯一物は、熱の力により出生せり~~（生命の開始）~~。

10.129.4 最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意（思考力）の第一の種子なりき。
詩人ら（霊感ある聖仙たち）は熟慮して心に求め、有の親縁（起原）を無に発見せり。

＊それ（かの唯一物）は最初に意欲として現れた。
それ（意欲）は思考力の/にとって第一の種子であった。
　　意欲は思考力の種子　→　思考力から意欲が生まれた、ということになる
　　意欲は思考力にとって種子となった　→　意欲から思考力が生まれた
＊意欲が思考力から生まれたとすれば、かの唯一物＝思考力？

10.129.5 彼ら（詩人たち）の縄尺は横に張られたり。下方はありしや、上方はありしや。
射精者（能動的男性力）ありき、能力（受動的女性力）ありき。

自存力（本能、女性力）は~~下に~~、許容力（男性力）は~~上に~~。

＊縄は彼ら（詩人たち）によって水平に張り渡された。
　　創造を、水平方向の広がりとして捉えている？
　　下方はあるのか、上方はあるのか　→　上下はない

*射精する者たち（複数、男性名詞）、
能力～偉大さ、広がり（複数、男性名詞）、
自存力～自ら生じる力（複数、男性名詞）、
許容力～差し出すこと、力（単数、女性名詞（抽象名詞））

＊自存力は上に、許容力は下に：avastāt / parastāt は、上に下に、ではなく、「こちら向きに」と「あちら向きに」。
「自ら生じる力、自然と生じる力」が「広がり～生み出す母体」に働きかけて生み出し、
「差し出す力」は外側に向けて広げる（射精する者たちを？）ような働き？

10.129.6 誰か正しく知る者ぞ、誰かここに宣言しうる者ぞ。
この創造（現象界の出現）はいずこより生じ、いずこより〔来たれる〕。
神々はこの（世界の）創造より後なり。
しからば誰か〔創造の〕いずこより起りしかを知る者ぞ。

10.129.7 この創造はいずこより起こりしや。
そは〔誰によりて〕実行せられたりや、あるいはまたしからざりしや、
――最高天にありてこの〔世界を〕監視する者のみ実にこれを知る。
あるいは彼もまた知らず。